

そらまめくん

本城学園 本城東幼稚園 (福岡県北九州市)

1 絵本「そらまめくんのベッド」<作・絵 中屋 美和 出版 福音館書店>を読み聞かせる

本園では、8年前からグリーンピースの収穫の際、この絵本を青空の下で、読み聞かせをしています。今回は「くものようにふわふわで、わたのようにやわらかいベッド」に視点を当てて、読み聞かせを展開します。

2 実物の「ソラマメ」を知り、ソラマメの殻をむく

[殻=豆科植物の種子をおおう部分]

絵本で「くものようにふわふわで、わたのようにやわらかい」そらまめ君のベッドをイメージした子ども達に実物のソラマメを提示し、実際に殻を割らせ豆を手にとさせます。子ども達は園庭で収穫したグリーンピースのことを思いだし、ソラマメの殻を割り豆を取り出します。そして殻の内側の様子や手触りや色や匂い、豆の形や大きさや手触りや色や匂いを体験します。

次に、この過程で出てくるであろう子ども達の「おおきいね」「やわらかい」「わたみたい」「くさのにおいがする」等の会話から、子ども達が自分でそらまめ君やそらまめ君のベッドを作る意欲へとつなげていきます。メルヘンの世界から現実へと橋渡しをするのです。



3 発達段階に応じて「そらまめくんのベッド」を作る

子どもの活動している姿を東京都品川区の二葉幼稚園の実践「遊びの中に広がる科学する心」で示された、6つの幼児の「つぶやき」でとらえます。①興味・関心、経験からの発見[「あれー」「なんだろう?」等] ②模倣、先行体験と結び付けて比較[「…と同じ」「…みたい」等] ③疑問[「なぜだろう?」「どうして」「ふしぎ」等] ④予測、創造する[「…かもしれない」「こうしたらどうかな」等] ⑤自分のイメージに近づけようと試す・工夫する[「…してみよう」「…してみたら」等] ⑥疑問への説明、納得、満足[「へー! こうなんだ」「～だから～なんだ」等]

上記のような「つぶやき」が子ども達から聞ける活動が出来たときに「科学する心」が育まれると考えます。

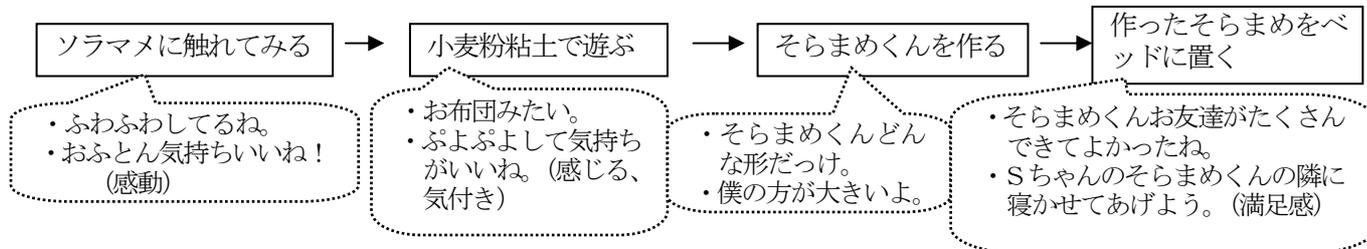
(実践事例集 vol.1 の5頁、二葉幼稚園の事例 参照 <http://www.sony-ef.or.jp/preschool/practice/index.html>)

(1) 3歳児の活動

まず、豆が入っているソラマメと入っていないソラマメを見せ、殻だけのソラマメに豆を作る活動をします。

次に、小麦粉粘土を使ってソラマメをつくります。この時、小麦粉粘土の手触りや柔らかさを感じとらせるため粘土遊びの時間を取ります。

そして、子ども達が作ったソラマメを教師が用意している大きなソラマメの殻のベッドに並べて寝かせます。

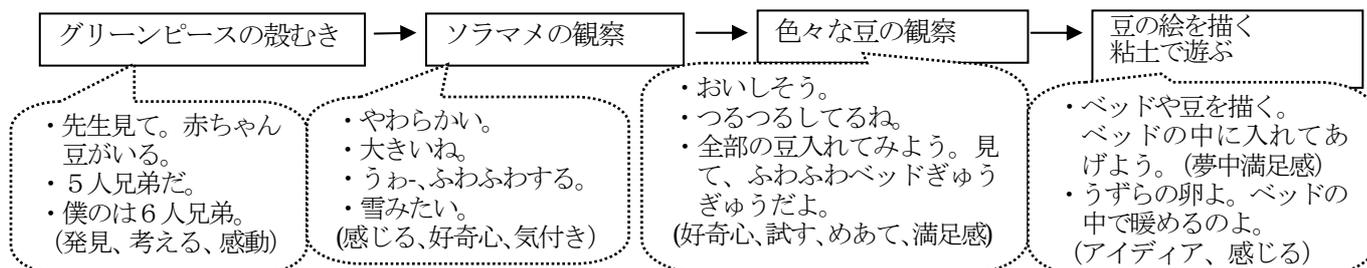


(2) 4歳児の活動

まず、グリーンピースの収穫をします。殻をむき豆を取り出します。その後、「そらまめくんのベッド」の絵本を見ます。グリーンピースの殻むきと比較しながら、絵本の世界をじっくり体験します。

次に、「そらまめくんのベッド」に登場する、ソラマメ、エダマメ、グリーンピース、サヤエンドウ、ピーナッツの実物を提示します。実物同士を比較観察し、見た目や手触りや色の違いを意識させます。特に、それぞれの豆の殻の内側である、ベッドの様子や手触りと共に豆の大きさに着目させます。絵本の世界と現実の世界をつなぐためです。

そして、子どもの気に入った豆について絵や粘土で表現します。ベッドに入っている様子、豆の形や大きさなどを意識させ、子どもがアイディアを形に表現して、創造の世界を体験できるようにします。

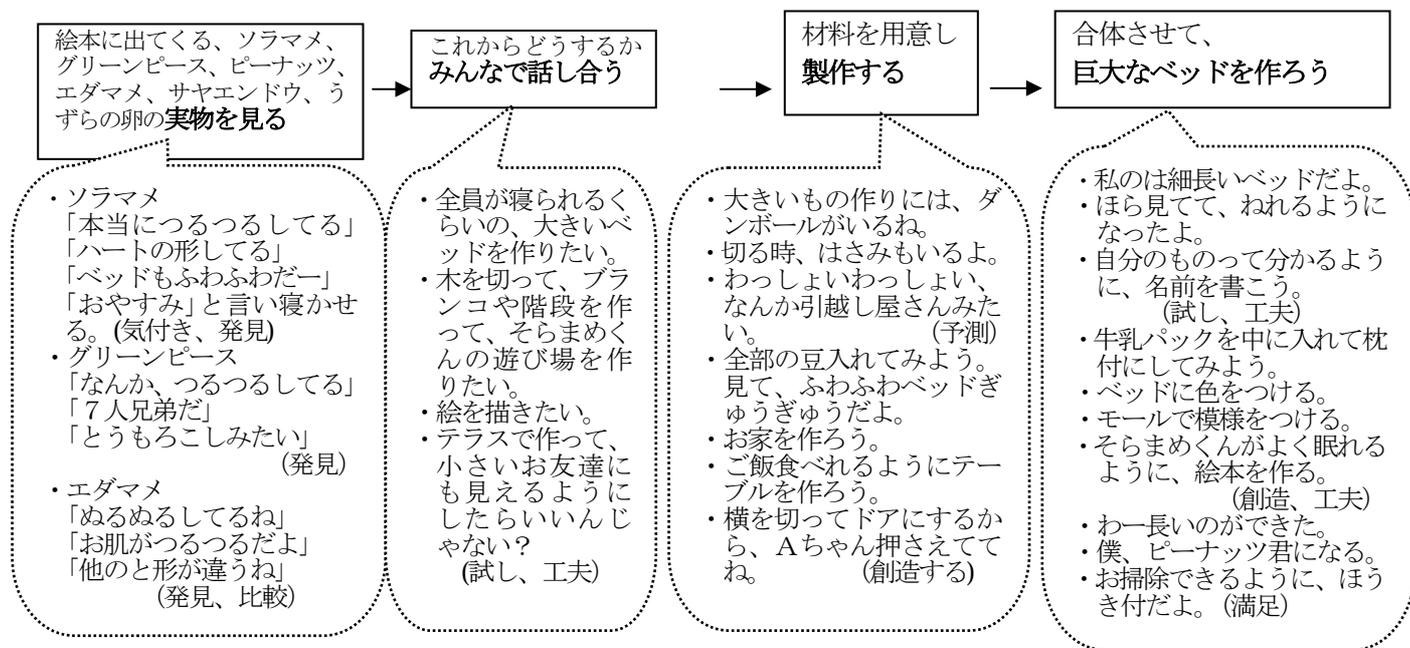


(3) 5歳児の活動

まず、「そらまめくんのベッド」、「そらまめくんとめだかのこ」、「そらまめくんとながいながいまめ」の3冊の絵本<作・絵 中屋 美和 出版 福音館書店>を読み聞かせるとき、絵本に出てくるすべての豆や卵を用意しておきます。絵本の読み聞かせが済んだ後、すぐに、見たり、触ったり、匂ったり、数えたりと、絵本と実物との比較ができるように提示するのです。

また、実際に豆の殻を割って「ふわふわベッド」が体験できるようにします。

次に、この体験をもとに、子ども達にどんな活動をしたか話し合いをさせベッド作りへと発展させます。クラス全員が協力しながら、しかも、個々の子ども達が個性を發揮し創造的な活動ができるように、材料や道具や時間を工夫します。



<考察>

絵本を見てから活動を進めたことで、実物の「ソラマメ」を見た時に、殻を割ったり、触ったり、匂ったりする活動を意欲的にし子ども達を生き生きとさせました。子ども達のつぶやきも「うわあ〜本当にふわふわしてる」「おもちゃみたい」「雪みたい」等、学年に応じた反応を示しました。特に、年中・年長組では絵本と実物をつなげた結果、「つるつる」「ぬるぬる」「きもちいい」などと発見したり・共感したりしたつぶやきも出ていました。「そらまめくんのベッド作り」では子どもへの目的の持たせ方によって活動に大きな違いが見られました。

年少組では小麦粉粘土でソラマメを作らせ、大きなベッドに学級全員の豆を寝かせることを考えていましたが、自作のベッドの提示が後になり活動の深まりを十分に引き出すことができませんでした。

年中組ではエダマメ、サヤエンドウ、ピーナッツ、グリーンピース等の本物の豆を用意し、提示したことが、子どもの好奇心を大きく揺さぶりました。絵本にあったように全部の豆を一緒に寝かせたベッドを作ったり、粘土を使って鶏の卵を作りベッドの中で暖めたりするなど、アイディア一杯の遊びを見ることができました。

年長組では「自分でもふわふわベッドを作りたい」という思いを中心にすえベッド作りを始めた結果、教師が考えていた以上の創作活動へと発展しました。

子どもに科学する心を育むには「教師のしかけと出番」がいかにか大切にすることが分かりました。

みどころ

この園では、様々な栽培活動が展開されています。その体験を通して、子どもたちはいろいろなことを感じていると思われます。この事例では、その「感じたり、気付いたり」していることを「発見、考え、工夫、創造、満足」に結びつくように保育が展開されています。その工夫の1点目は、絵本「そらまめくんのベッド」という実態にあった教材を選択し、子どもたちが共通のイメージや知識を持てるようにしました。それにより、イメージしたことと実物とをつなげて、発見したり共感したりする表現が引き出されました。さらに工夫の2点目は、年齢に応じた教材を提示し、「発見、考え、工夫、創造、満足」に結びつくような表現を引き出し、創造を楽しむようにしました。満足感を味わうことで「科学する心」も豊かになることが期待できます。

他園の先行研究を参考にしたことで保育者同士の共通理解が図りやすくなり、幼児の姿を捉える視点をもって実践をし、「科学する心」が育まれたという実態を把握することにつながりました。